

第170回 岡山外科会

日時：平成21年10月17日（土）13：00～

場所：岡山済生会ライフケアセンター やすらぎホール

会長：大原利憲

（平成21年10月28日受稿）

1. 当院におけるケロイドの治療

岡山済生会総合病院 形成外科

安井史明, 松本洋, 永瀬洋

ケロイドは良性疾患であるが難治性であり、単純な切除だけでは再発率が高く治療に難渋することが多い。当院ではケロイドの切除後に電子線照射を併用した治療を行っている。実際の症例を供覧し、多少の文献的考察を加えて報告する。

2. 胸壁欠損に対し遊離腹直筋を用いて再建を行った1症例

岡山大学病院 形成外科

片山裕子, 大槻祐喜, 安積昌吾
小野田聡, 佐野成一, 渡部聡子
田中義人, 山田潔, 長谷川健二郎
難波祐三郎, 木股敬裕

【症例】75歳男性 肺尖部アスペルギルス症に対し保存的治療を施行するも著明な改善を見ず。経過観察中に右鎖骨下に直径5mmの瘻孔を自覚した。デブリドマン後、死腔の充填が必要と判断し当科紹介となった。瘻孔は肺尖部およびそこから背部につながる cavity にも連続しており、これらを一塊として当院呼吸器外科にてデブリドマン後遊離腹直筋皮弁にて充填術を施行した。今回我々は肺尖部アスペルギルス症に対し、肺尖部デブリドマン後遊離腹直筋皮弁にて死腔充填術を施行し、良好な結果を得たので報告する。

3. 放射線照射後の空腸-膀胱-皮膚瘻を再建した1例

岡山大学病院 形成外科^a, 赤穂はくほう会病院 外科^b

小松星児^a, 木股敬裕^a, 河本純一^b
萱野公一^b

75歳女性。11年前に子宮頸癌に対して放射線照射を行われた。10年前に小腸穿孔を起こし開腹された。9年前にシリコンシートで腹壁瘻痕ヘルニアを修復された。8ヵ月前にイレウスとなり空腸部分切除を行ったが、縫合不全を起こし、空腸-膀胱-皮膚瘻となった。シート摘出、人工肛門

増設、有茎前外側大腿皮弁による再建を同時に行い治癒させた。悪条件下の症例であったが、血流の良好な組織で充填することにより治癒せしめた。

4. 肩甲骨頸部骨内ガングリオンに対する肩関節鏡視下手術の1例

総合病院岡山赤十字病院 整形外科

小澤正嗣, 小西池泰三

肩甲骨頸部、関節窩直下にガングリオンを形成した1例を経験したので報告する。症例は45歳男性、肩のだるさを主訴に受診した。X線像にて肩甲骨関節窩の関節面直下に骨透亮像を認め、MRI像にてこの内部はT2強調像で高信号を示していた。骨内ガングリオンを疑い、肩関節鏡視下にドリリングを行った。ガングリオンのサイズは比較的大きく、将来病的骨折をきたす可能性もあり、慎重な経過観察が必要であると考えている。

5. 受傷7日後に開放骨折となった高齢者の上腕骨通頸骨折の1例

岡山済生会総合病院 整形外科

井上円加, 今谷潤也, 清水弘毅
高田逸郎, 岡田幸正, 中道亮
大塚亮介, 山川泰明, 川上幸雄
林正典

【症例】95歳、女性。自宅にて転倒し、左肘打撲した。骨折を指摘されシーネ固定していたところ、7日目に出血を認めたが放置。10日目の当科初診時、左肘関節外側の創から近位骨片が突出していた。レ線は左上腕骨通頸骨折。同日緊急で洗浄、デブライド、創外固定術を施行した。感染の鎮静化を待って創外固定を除去後、観血的整復、内固定を施行した。最終調査時、左肘関節可動域は -20° ～ 130° であり、感染の再発も認めていない。

6. 踵骨裂離骨折の治療経験

岡山労災病院 整形外科

小野 智毅, 寺田 忠司, 門田 弘明
難波 良文, 花川 志郎

【はじめに】比較的稀な踵骨裂離骨折を経験したので報告する。

【症例提示】56歳, 女性. 約3ヵ月前に右足関節外果骨折を受傷し近医にて保存加療中, 屋内にて転倒して右踵骨裂離骨折を受傷. 3日後, 腰麻下にワイヤリングにて整復内固定術を行い, 術後は短下肢ギプス固定とした. 術後4週にてPWB開始, 術後6週でギプス除去, 術後8週にてFWBとした. 最終調査時の術後3ヵ月, 再転位みられず疼痛なく独歩可能である。

7. 当院における大腿骨転移性骨腫瘍に対する内固定術の検討

岡山済生会総合病院 整形外科

服部 靖彦, 川上 幸雄, 大塚 亮介
中道 亮, 山川 泰明, 岡田 幸正
井上 円加, 高田 逸朗, 清水 弘毅
今谷 潤也, 林 正典

当院において2008年10月以降の1年間に大腿骨病的骨折に対する骨接合あるいは除痛目的に内固定を行った大腿骨転移性骨腫瘍8例について検討した. 男性6例, 女性2例, 手術時年齢は30~87歳, 平均67.9歳であった. 原発疾患は肝細胞癌3例, 肺癌3例, 乳癌1例, 大腸癌1例であった. インプラントは7例に髓内釘を, 1例にLocking plateを用いた. 全例において良好な固定性および除痛が得られ, QOLの向上を認めた。

8. 先天性内反足に対するアキレス腱切腱術の短期治療成績の検討

岡山大学病院 整形外科

金澤 智子, 遠藤 裕介, 三谷 茂
鉄永 智紀, 尾崎 敏文

【目的】当科で先天性内反足に対してアキレス腱切腱術を施行した症例について, その短期治療成績を調査検討すること

【対象】対象は2005年から2009年に当院でアキレス腱切腱術を施行した先天性内反足7例9足

【調査項目】距踵角, 脛踵角, Piraniスコア

【結果】距踵角は平均30度に, 脛踵角は78度に, Piraniスコアは平均0.9点に改善していた。

【考察】短期成績は概ね良好であったが, 9足中3足に内転, 内反変形の残存を認め, ギプス矯正の角度, 矯正期間

が短いことが一因と考えられた。

9. 当院における化膿性膝関節炎の治療経験

岡山済生会総合病院 整形外科

大塚 亮介, 林 正典, 今谷 潤也
川上 幸雄, 清水 弘毅, 高田 逸朗
井上 円加, 岡田 幸正, 中道 亮
山川 泰明, 服部 靖彦

平成17年から21年の間に, 当院で経験した化膿性膝関節炎11例(男6例女5例, 平均年齢68.5歳)について検討した. 治療はdebridmentと持続洗浄の併用を基本とし, 関節鏡視下処置7例, 観血的処置4例であった. 手術までの平均期間は8.5日. 平均追跡期間は5.6ヵ月であった. 術後経過で, 1例が死亡したが, それ以外の症例では追加処置を必要とせず, 比較的良好な機能回復が得られた。

10. 化膿性膝関節炎後の膝蓋骨脱臼を伴った大腿骨変形に対する矯正術を行った1例

岡山大学病院 整形外科

斎藤 太一, 遠藤 裕介, 三谷 茂
鉄永 智紀, 尾崎 敏文

今回外反膝変形に対して複数回の大腿骨の矯正骨切り術を行った1症例を経験したので報告する. 症例は10歳男児. 生後1ヵ月時に化膿性膝関節炎に罹患し治癒したが, 大腿骨遠位外側部の骨端線障害が発生. 徐々に変形が進行したため6歳時に大腿骨を1ヵ所で骨切りし, 矯正と2cm延長を施行. 術後変形が再発し膝蓋骨が脱臼したため9歳時大腿骨を2ヵ所で骨切りし, 矯正, 脱臼していた膝蓋骨の整復, 3cmの延長を施行した。

11. 経皮的鏡視下病巣搔爬およびドレナージを施行した腰椎化膿性脊椎炎

岡山市立市民病院 整形外科^a, 岡山市立せのお病院 整形外科^b

山名 圭哉^a, 町田 芙美^a, 木浪 陽^a
茂山 幸雄^a, 白井 正明^a, 小西 均^b

症例49歳男性. 既往歴, 糖尿病. 主訴: 腰痛, 発熱. 現病歴: 3週間前から腰痛発症. 平成21年8月2日急激に悪化. 麻痺なし. MRIでL1/2のT2高輝度像を認め, 化膿性脊椎炎と診断した. 8月17日全身麻酔下に鏡視下手術施行. 術後体幹ギプスでリハビリ施行. 9月以後, 発熱は認めず腰痛消失, CRP陰性化し退院となった. 鏡視下に十分な病巣搔爬, 洗浄およびドレナージを施行して, 感染が早期に沈静化したものと考えた。

12. EBV 関連 HLH に伴う小児劇症肝炎の 2 例

岡山大学病院 肝胆膵外科

大西 哲平, 吉田 龍一, 保田 裕子
内海 方嗣, 佐藤 大祐, 篠浦 先
松田 浩明, 貞森 裕, 八木 孝仁

今回、我々は、EBV (Epstein-Barr virus) 関連 HLH (hemophagocytic lymphohistiocytosis) に伴う小児劇症肝炎の 2 例を経験した。症例 1 は 4 歳女児。劇症肝炎に対し、生体肝移植を施行するも、術直後からグラフト肝の急性障害を認めた。全血 PCR にて、EBV 関連 HLH に伴う劇症肝炎と診断した。その後、VP16 を含む免疫化学療法を施行し、軽快傾向となった。症例 2 は 12 歳男児。EBV 関連 HLH に伴う劇症肝炎に対し、同様に免疫化学療法にて軽快した。EBV 関連 HLH の診断において、PCR が有用であった。

13. 肝内胆管癌との鑑別が困難であった胆管炎の一例

川崎医科大学附属病院 消化器外科

貞光 隆志, 窪田 寿子, 浦上 淳
甲斐田 裕子, 村上 陽昭, 東田 正陽
平林 葉子, 岡 保夫, 奥村 英雄
松本 英男, 山下 和城, 平井 敏弘

胆管細胞癌を疑い手術後に胆管炎と診断された症例を経験したので報告する。70 歳代の男性。発熱のため近医を受診し、胆管炎を疑われ抗生剤で軽快した。発熱を繰り返すため、当院を受診し、PET-CT で肝外側区域に高集積領域を認め精査目的で入院となった。採血では特に問題なく、腫瘍マーカーも正常であった。ERCP で左肝管の一部に狭窄を認めたが、胆汁細胞診で class II であった。CT で肝門部に不均一に造影される腫瘤を認め、末梢の肝内胆管の拡張を認めた。胆管細胞癌と診断し、肝左葉切除術を行った。病理所見は左肝管周囲に好中球の浸潤と膿瘍の形成を認め、胆管炎と診断した。

14. 肝癌切除後のリンパ節再発に対して切除を行った 5 症例の検討

岡山大学病院 肝胆膵外科

内海 方嗣, 佐藤 太祐, 吉田 龍一
榎田 祐三, 篠浦 先, 松田 浩明
貞森 裕, 八木 孝仁

肝癌術後の孤立性リンパ節再発は比較的多いと報告されている。切除例により良好な予後がえられている報告も散見されおり治療に関しては切除可能であれば切除が第一選択となっている。我々は肝細胞癌切除後の孤立性リンパ節再発に対して切除をおこなった 5 例を経験したので報告する。

15. 胆管内腫瘍栓を繰り返し、切除を行った肝細胞癌の一例

岡山済生会総合病院 外科

安井 和也, 仁熊 健文, 石川 亘
保田 紘一郎, 三村 哲重

症例は 70 歳男性。66 歳時、肝 S8 単発の肝細胞癌に対し RFA 施行。4 ヶ月後右肝管から総胆管内に腫瘍栓が出現したが肝内に明らかな再発は認めなかった。腫瘍栓摘出後、肝動注化学療法を行い経過観察していた。34 ヶ月後に胆管内腫瘍栓再発。再度摘出時に前回 RFA 部近傍より発育が疑われたため、PTPE 後に肝右葉切除・胆管内腫瘍栓摘出術を施行した。胆管内腫瘍栓を繰り返した肝細胞癌の一例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

16. 胆嚢捻転症の二例

岡山市立市民病院 外科

寺本 淳, 川崎 伸弘, 庄賀 一彦
石川 隆, 光岡 晋太郎, 羽井 佐実
松前 大, 濱田 英明

胆嚢捻転症は高齢女性に多い比較的多い胆道疾患である。最近我々は本症の二手術例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。症例 1 78 歳女性。上腹部痛で発症。炎症反応は軽度であったが画像上胆嚢の腫大、周囲の腹水貯留などを認め急性胆嚢炎として保存的加療を行ったが増悪を認めたため発症 5 日目に手術を施行した。症例 2 82 歳女性。腹痛、嘔吐で発症。精査にて急性胆嚢炎と診断し同日緊急手術を施行した。

17. 限局性悪性胸膜中皮腫を胸腔鏡下に切除し得た 1 例

総合病院岡山赤十字病院 外科

橋田 真輔, 森山 重治, 奥谷 大介
中原 早紀, 吉富 誠二, 山野 寿久
高木 章司, 山本 典良, 池田 英二
平井 隆二, 辻 尚志

症例は 74 歳女性。アスベストの暴露歴はなし。前医の胸部レントゲン異常影を指摘され、CT で左肺 S8 付近に腫瘤影を認めた。PET では同部に FDG 集積を認めたが、気管支鏡では確定診断されなかった。当院を紹介され、胸腔鏡で病変を観察したところ、腫瘍は横隔膜面より発生していた。横隔膜部分切除で腫瘍を摘出した。標本の免疫染色では keratin 陽性、calretinin 陽性であり、悪性胸膜中皮腫と診断された。

18. PryceV 型肺分画症の 1 例

総合病院岡山赤十字病院 外科

奥谷 大介, 森山 重治, 橋田 真輔
中原 早紀, 吉富 誠二, 山野 寿久
山本 典良, 高木 章司, 池田 英二
平井 隆二, 辻 尚志

異常血管を伴わない PryceV 型肺分画症を経験した。症例は34歳の男性。既往歴として繰り返す肺炎がある。2009年4月検診胸部 Xp にて左下肺野の異常陰影を指摘された。CT にてB10領域の気管支の途絶像と同部の肺炎像を認めた。3D-CT・気管支鏡検査では異常所見を認めなかった。以上より異常血管を伴わない肺分画症の疑いで胸腔鏡下左下葉切除術を施行した。摘出標本の気管支造影にて PryceV 型肺分画症と診断した。

19. 胸腔鏡補助下に切除した縦隔内甲状腺腫の 1 例

岡山済生会総合病院 外科

安原 功, 片岡 正文, 大原 利憲

症例は65歳、女性。検診にて縦隔腫瘍を指摘され精査加療目的に当院受診された。造影 CT にて中縦隔気管右前方に31×25mm大の辺縁明瞭で hypervascular な腫瘍を認めた。キャスルマン病、悪性リンパ腫などの縦隔腫瘍を考え、胸腔鏡補助下縦隔腫瘍切除術施行した。非浸潤性で被膜を有する境界明瞭な腫瘍であった。病理組織診断は異所性甲状腺腫であった

20. 転移性肺腫瘍との鑑別に苦慮した肺クリプトコッカス症の 1 例

津山中央病院 外科

木村 圭佑, 鳴坂 徹, 馬場 雄己
青山 克幸, 渡邊めぐみ, 吉田 一博
水野 憲治, 松村 年久, 山田 隆年
野中 泰幸, 林 同輔, 宮島 孝直
黒瀬 通弘, 徳田 直彦

症例は87歳男性。直腸癌術後、前立腺癌ホルモン療法中にて通院中。PET-CT にて、集積は認めなかったが右肺上葉にφ7mmの結節影出現。3ヵ月後のCTではφ11mmに増大し、転移性肺腫瘍が疑われた。診断と治療を兼ね胸腔鏡下肺部分切除術を施行し、病理にてPAS染色、ムチカルミン染色陽性の菌体が認められ、肺クリプトコッカス症と診断された。免疫の低下した高齢者では、鑑別診断に上げるべき疾患と考えられた。

21. 自殺企図による頸部気管断裂の 1 例

津山中央病院 外科

鳴坂 徹, 馬場 雄己, 木村 圭佑
青山 克幸, 渡邊めぐみ, 吉田 一博
水野 憲治, 松村 年久, 山田 隆年
野中 泰幸, 林 同輔, 宮島 孝直
黒瀬 通弘, 徳田 直彦

症例は82歳女性。うつ病の既往あり。自宅にて包丁で頸部を自傷したのを発見され救急搬送された。左前頸部に挫創あり、創部から空気の漏出を認めた。皮下気腫・縦隔気腫も認め、気管損傷を疑い気管内挿管施行後、緊急手術を行った。挿管後は空気の漏出は停止した。気管は甲状腺下極で膜様部の一部を残し断裂しており、断裂部を4-0マクソんで結節縫合し閉鎖した。本症は初期の気管損傷の認識と気道確保が重要であると考えられた。

22. 慢性リンパ性白血病経過中に白血病細胞の浸潤を認める急性虫垂炎を呈した一例

岡山済生会総合病院 外科

小松 泰浩, 安原 功, 片岡 正文

症例は65歳、男性。慢性リンパ性白血病にて経過観察中、前立腺癌を指摘され前立腺切除術施行。術後7日目に激しい右下腹部痛を訴えた。CTを施行したところ虫垂の腫大を指摘され、急性虫垂炎の診断で虫垂切除術を施行した。虫垂は先端が著明に腫大し、周囲と強固に癒着していた。病理学的所見にて虫垂の筋層から漿膜下層にかけて小型のリンパ球の集簇を認め、臨床経過と併せて白血病細胞の浸潤が疑われた。

23. 虫垂放線菌症の 1 例

岡山済生会総合病院 外科

宇川 諒, 安原 功, 片岡 正文

症例は20歳男性。腹痛を主訴に当院受診。37.8℃の発熱と、右下腹部に筋性防御を伴う、圧痛、反跳痛を認めた。採血にて炎症反応の上昇を認め、CTにて虫垂の腫大を認めたため急性虫垂炎と診断し、虫垂切除術を施行した。術後経過は良好で、5日後に軽快退院となった。切除した虫垂体部にやや硬い部分を認め、病理学的検査にて虫垂放線菌症と診断された。虫垂放線菌症は比較的稀であり、文献的考察を加え報告する。

24. 回盲部重複腸管に対し重複腸管粘膜切除術を施行した1例

川崎医科大学附属病院 小児外科

牟田裕紀, 植村貞繁, 中岡達雄
吉田達之, 谷本光隆, 三宅啓

症例は8才男児。反復する腹痛を主訴に近医受診, 超音波で腹腔内に腫瘤認め当院に紹介された。CTで回盲部付近に壁が造影される cystic な病変を認め, 重複腸管と診断した。腹腔鏡で観察したところ, 回盲部の腸間膜側に腫瘤を認めた。重複腸管切除では回盲部切除となるため, 小開腹のうえ重複腸管を切開し, 筋層は残して粘膜切除術を行った。この術式は回盲部を温存する方法で非常に有効である。

25. 直腸肛門部悪性黒色腫の1例

岡山済生会総合病院 外科

谷口文崇, 赤在義浩, 新田泰樹
児島亨, 保田紘一郎

直腸肛門部悪性黒色腫はまれな疾患である。今回われわれは切除しえた直腸肛門部悪性黒色腫の一例を経験したので報告する。症例は71歳男性。下部消化管内視鏡検査にて下部直腸より歯状線まで黒色斑, 色素沈着を認め, 生検で悪性黒色腫が疑われた。術前検索では明らかな転移巣はなく, 腹会陰直腸切断術, 人工肛門造設, リンパ節郭清を施行した。切除標本では大部分が粘膜内病変だったが一部粘膜下層への浸潤を認めた。

26. 腔瘻, 痔瘻を伴った直腸癌の1例

岡山済生会総合病院 外科

垣内慶彦, 國府島健, 丸山昌伸
新田泰樹, 赤在義浩

症例は63歳女性。下部直腸に全周性の腫瘤を認め, 腫瘤は浸潤傾向が強く, その一部は肛門から突出し, 腔後壁および肛門周囲皮膚に瘻孔を形成していた。CT, MRIでは腔浸潤および肛門挙筋への浸潤が疑われた。組織診では中分化腺がんであった。肛門周囲膿瘍を含めて直腸肛門, 腔後壁, 肛門挙筋など浸潤の疑われる範囲を切除した。再建には腔形成を行い一期的に会陰を閉鎖した。再建術を中心に報告する。

27. 胃切除術におけるドレーン留置の必要性に関する検討

倉敷成人病センター 外科

山野武寿, 池田義博, 仁科拓也
村嶋信尚, 中山文夫, 松本剛昌
飽浦良和

我々の施設では幽門側胃切除術においてはハイリスク症例を除いて基本的にドレーンを留置していない。胃切除術におけるドレーン留置の必要性について検討した。幽門側胃切除術173例のうち術中にドレーンを留置したのは6例であった。縫合不全を3例(留置1例, 非留置2例)に認め, うち2例は保存的に軽快しドレナージを要したのは1例のみであった。幽門側胃切除術においては必ずしも術中ドレーン留置は必要でないと判断した。

28. HALS と器械吻合による合理的腹腔鏡補助下幽門側胃切除術

倉敷成人病センター 外科

中山文夫, 池田義博, 山野武寿
仁科拓也, 村嶋信尚, 松本剛昌
飽浦良和

早期胃癌に対する腹腔鏡補助下幽門側胃切除術(LADG)を48例経験した。最近の25症例にはHALSを用いている。大彎側と左胃動脈周囲を郭清はHALSで施行。正中の小切開創から右胃動脈, 右胃大動脈周囲の郭清を施行。さらに小切開創から残胃後壁と十二指腸を自動吻合器で吻合。再発症例はなし。平均手術時間114分, 平均出血量58mlと良好な成績であった。HALS併用LADGは合理的術式とおもわれるので報告する。

29. 腹腔鏡下に切除し得た異物穿通による肉芽性腫瘍の1例

岡山済生会総合病院 外科

赤木洋介, 保田紘一郎, 新田泰樹

71歳女性, 主訴は腹痛, 約1ヵ月前から下腹部痛の増悪と軽快を繰り返していた。CT, MRIで左腹直筋の背側に小腸, 大網, 腹壁と連続する造影効果を伴う33mm大の腫瘤を認めた。腹腔鏡下小腸部分切除, 腹壁, 大網合併切除を施行した。病理組織診は炎症細胞浸潤と繊維化を伴った境界不明瞭な肉芽性病変で膿状変化を来しており, その直上の小腸粘膜に5mm大の小潰瘍を形成しており, 異物穿通による肉芽性腫瘍が疑われた。

30. 呼吸困難・意識障害で発症した、門脈内ガスを伴った非閉塞性腸間膜虚血症の1例

津山中央病院 外科

馬場雄己, 鳴坂 徹, 木村圭佑
青山克幸, 渡邊めぐみ, 吉田一博
水野憲治, 松村年久, 山田隆年
野中泰幸, 林 同輔, 宮島孝直
黒瀬通弘, 徳田直彦

症例は38歳男性。糖尿病の既往あり。飲酒後、呼吸困難・意識障害を主訴に救急外来受診し、高血糖と著明な代謝性アシドーシスを認めた。腹部症状は無かったが、CTにて門脈内ガスを認め腸管壊死を疑った。集中治療によりバイタル安定後、開腹術施行。回腸からS状結腸におよぶ腸管虚血を認め腸管大量切除・空腸人工肛門造設術を行った。若年者であるが、アルコールと高血糖が引き金となった脱水により発症したものと考えられた。

31. PTP 誤嚥による十二指腸穿孔の一例

岡山市立市民病院 外科

庄賀一彦, 濱田英明, 松前 大
羽井佐 実, 光岡晋太郎, 石川 隆
川崎伸弘, 寺本 淳, 小松原基志

症例は84歳女性。平成21年7月、自宅で朝の服薬時に錠剤を Press-through-package (PTP) ごと飲んだのではないかという自覚があったが経過観察。同日昼前から軽い上腹部痛が出現し、翌日早朝に腹痛の増強のため救急外来を受診となった。CT 検査で腹腔内 free air と十二指腸水平脚内に PTP に入った錠剤と思われる陰影を認め、PTP による十二指腸穿孔の診断で緊急開腹手術となった。十二指腸の穿孔部を開き PTP を除去し一期的に閉鎖した。

32. 当科における食道アカラシア手術の経験

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 消化器・腫瘍外科学

近藤喜太, 田辺俊介, 藤原康宏
野間和広, 白川靖弘, 山辻知樹
貞森 裕, 八木孝仁, 猶本良夫

食道アカラシア症例に対し、腹腔鏡下手術施行し、良好な経過であった症例を経験したので報告する。症例：20台、40台男性 現病歴：いずれの症例も数年前からの嚥下困難感にて保存的に加療も、改善乏しく当科紹介。検査：LES 弛緩残圧はそれぞれ24.8, 70mmHg。経過：鏡視下筋層切開噴門形成施行し、翌日より飲水開始。合併症認めず良好に経過。結語：食道アカラシアに対し、鏡視下手術施行し、良好に経過した二例を経験した。症例提示する。

33. 当科における食道癌を含む三重複癌の検討

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 消化器・腫瘍外科学

井筒将斗, 田辺俊介, 藤原康宏
野間和広, 櫻間教文, 白川靖博
山辻知樹, 小林直哉, 藤原俊義
貞森 裕, 八木孝仁, 松岡順治
猶本良夫

食道癌に他臓器の悪性腫瘍が合併することはよく知られており20%前後の症例が重複がんを合併すると言われている。この中でも頻度の高いものは頭頸部癌の合併であり、ついで胃(管)癌である。さらにNBI, PET-CTを含めた各々のがん腫の診断技術・治療成績の向上の影響もあり3つめ以上の病変が発見される頻度も増加している。食道癌診療においては各種診断モダリティを駆使し長期的な術後経過観察と早期発見に努めることが肝要と思われた。